

ソヴェト旅行雑感

岡崎 栄 松

まえがき

一九六五年一〇月から六六年七月まで、私は本学の在外研究員としてイギリス（ロンドン大学L・S・E）に留学し、イギリス古典学派の経済理論とマルクス経済学（とくに論理と歴史の問題を中心として）の研究に従事したが、かねがね社会主義国の実情に接したいと考えていた私は、この機会をとらえてソ連とチェコスロヴァキアを訪れるべく、目的地ロンドンへの道程を、横浜——ナホトカ——ハバロフスク——モスクワ（五日間滞在）——ブラーグ（二日間滞在）——ロンドンというふうに設定した。

私がソ連船バイカル号で横浜港を発ったのは一〇月五日の正午、そしてソ連機TU——一四型機でモスクワをあとにし

ソヴェト旅行雑感（岡崎）

たのが一〇月三日午前二〇時。だから私のソヴェト旅行は——船上の旅もふくめて——九日足らずにすぎなかったが、それでも私はこの間に、さまざまな体験をつうじて社会主義国の実情の一端にふれたいように思う。

以下の一文は、私のソヴェト旅行中の出来事や見聞や感想を日記形式でまとめたものである。

なおソヴェト旅行にかぎらず、このたびの海外留学にかんしては、私は末川総長はじめ多くの方々にひとかたならぬお世話にあずかった。記して深く謝意を表する次第である。

一 モスクワに着くまで

一〇月五日（火）

ソ連船バイカル号は、みだれとぶテープのなかを、正午か

六七（五七一）

つきりに横浜港をはなれた。この船には、全農林労組の訪ソ団一行が同乗しているとかで、埠頭の一角に陣どった労組の見送り人たちが、いくつもの組合旗をたなびかせ、また出発の少しまえからはプラス・バンドでロシア民謡をかなでたりして、いかにもソ連船の船出らしい雰囲気を感じていた。

われわれのバイカル号は、東京湾を出たあと本州ぞいに太平洋を北上して、津軽海峡から日本海側にはいるわけだが、出港して数時間後に、だんだんと船の揺れが大きくなってきて閉口した。内海育ちの私は、黒々とした太平洋の波のうねりにすっかり驚いてしまった。約五〇〇〇トンというこの程度の船では廊下を歩くのにも、なにかにつかまっていけないと危いほどである。それでいて天候はべつに悪いわけではなく、むしろ好天に恵まれたという感じなのだから、不思議なものである。

ところで、ソ連インツーリスト（国营旅行社のことで、日本の交通公社にあたる）の案内書によると、このバイカル号は、これまでのオルジョニキツェ号にかわって一九六五年のはじめから横浜⇨ナホトカ間の定期航路（月二⇨三回、ただし一二月から三月までは欠航）に就航することになったもの

で、横浜⇨ナホトカ間九〇〇マイル（約一四四〇キロ）の所要時間は五三時間、収容船客は約三〇〇名ということである。さいきん、この船を利用する人が急に増えてきたとかで、この便もほぼ満員のようである。私の推定では、船客の構成はソ連人が約一五〇人、日本人が一〇〇人前後、ほかにフランス人、ドイツ人、イギリス人、アメリカ人など欧米人が四〇人程度といったところ。さして大きくもない船であるが、新しいだけに大へんきれいで、船内の設備も、食堂、メイン・ホール（これには映写設備もついている）、談話室、スナック・バー、みやげもの売場、理髪所と、ひととおり揃っている。なお案内書には、いかにも社会主義国のせらしく、一本船には、よくととのつた医務室があり、また有資格の医者がい、わが国のすべての場所におけると同様、本船上でも医療サーヴィスは無料である」と書かれている。

私の船室はアップパー・デッキの左舷中央部にあつて、二人共用の部屋である。いくらか手ぜまな感じだが、ベッド、机、椅子、スタンド、ラジオ、ソファアなど備品はすべて小ぎれいで、居心地はまずまずといったところである。この船には社会党の文化使節団の一行（団長は黒田久太氏、団員は長洲

一二氏、中村秀一郎氏、山崎春成氏、大橋周治氏ほか三名が乗っていて、その一行の事務局長で沖崎という人が私の部屋に同泊している。

午後七時、夕食のアナウンスがあったので、沖崎氏とともに食堂へ出かけていった。ソ連のウエイトレスたちはみんな大柄で、いかにもロシア的なタイプの女性である。彼女たちはなかなか愛想がよく、サーヴィスもゆきとどいているが、ただ、ごく少数のものを除いては英語が全然といってよいくらい通しないには閉口する。食事の内容は概して良好。もちろんロシア料理がほとんどである。献立は、一食まえの食事時間のときにメニューを見て各人が自分の好きなものを選んでおくというシステムになっている。

夕食後は、船室でしばらく旅行案内書を読んだり、沖崎氏と雑談をかわしたりしていたが、やがて疲れを感じて十時就床。

一〇月六日（水）

午前七時起床。

昨夜は船の揺れ方がひどかったので、眠れるかどうか心配したが、案外よく眠れて今朝は気分爽快である。一週間来の

風邪も下火になってきたようで、この調子だと二、三日うちには全快するものと思われる。

朝食後、ボート・デッキに上って見たが、このデッキの後部には二〇脚ほどの籐椅子が置いてあって、ここが一種の展望台になっている。外人、日本人が入り乱れてめいめい景色に見入ったり、新聞や雑誌を読んだりしているなかを、私も空席に腰をおろして、しばらくのあいだ東北地方の山々に目を注いでいた。

こうして私は二時間近くをデッキで過したが、やがて寒さを感じて船室へひきかえした。船室には沖崎氏がいて、私の帰えるのを待っていたという。氏の話では、このバイカル号にはルムンバ大学（アジア・アフリカ諸国、中南米諸国の学生のために一九六〇年一〇月、モスクワに開設された諸民族友好大学）に留学する日本人学生が数名乗っているそうで、今日の夕食後にその学生たちと社会党の使節団一行とが懇親会を催すことになったので、私にもぜひ出席してほしいというのである。せっかくの申し出なので、今夜はその集りに出ることにした。

昼食後は、メイン・ホールで映画を見たり談話室で雑誌を

読んだりして時をすごしたが、四時頃、バイカル号が津軽海峡にさしかかったというので、私はふたたびポート・デッキに上っていった。すると左舷に本州北端の大間崎灯台が手にとるように見え、右舷には、暮れかかった函館の街並が美しく望まれる。私は、むこう一〇カ月間見ることのできない日本の風物に、しばし別れを惜しんだことである。

さて夕食後、八時からは前記の懇親会に出たが、これには全農林労組の人々も合流して、会場に当てられたスナック・バーはたちまちにして満員の盛況になった。軽食とビールで歓談したのだが、そのときの話では、ルムンバ大学に留学するという学生六名は、いずれも今春、高等学校を卒業した人たちで、これから五年間モスクワに滞在して同大学を卒業したのち日本へ帰国するということであった。なお、げんざい・ルムンバ大学には八〇カ国以上の青年男女約三〇〇〇人が留学している由である。

懇親会は九時頃、なごやかな雰囲気のうちに終わったが、そのあとがまた大へん愉快であった。というのは、バイカル号の乗組員やウェイトルスたちが船客のために「慰安の夕べ」といったものを催してくれたのである。船内のメイン・ホー

ル（一〇〇人くらい収容できる）でこの催しがあったわけだが、これは恒例らしく、ちゃんとバンドが編成されていて、コーラスも踊りもなかなか堂に入ったものである。といっても、いわゆるショーとはちがって、彼らはこれを「義務」としてやっているわけではなく、むしろ彼ら自身ぜんぶんに楽しみながら、国際友好を深めるためにやっていることが察せられて、私にはそれがひどく気持ちよく感じられた。とにかく、ホール一杯につめかけた船客のなかで、ロシア民謡やコサックの踊り、それに日本の民謡などがつきつきと披露されて、まったく楽しいひとときであった。とりわけ、きれいな民族衣装で着かざったウェイトルスたちのコーラスと踊りは、じつに見事なものであった。

一〇月七日（木）

午前七時半、船室内のラジオから低く流れてくるロシア語放送で目をさました。気分は上々。風邪もすっかり治ったようである。

昨日まではまだ、デッキに上れば日本の山々を望むことができたし、またときには、こちらに向って手を振る日本漁船の乗組員たちの姿を見かけたりしたので、日本をはなれたと

いう感じがそれほど強くなく、いくらか中途半端な気持であったが、いよいよ今夕には異国の土——それも社会主義國の土！——をふむことになる。

さて朝食後、私は船室近くのデッキにたたずんで、はてしなくつづく海景色に見入っていたが、そこへ長洲氏、沖崎氏、中村氏、山崎氏ほかの人たちがやってきたので、しばらくこれらの人たちと雑談をかわした。このときには、むろん船は日本海の奥深くに入っていて、一路ナホトカ目ざして進んでいたわけであるが、海の色が昨日までのどす黒さを失って青味がかっていること、波のうねりがはるかに小さくなっていくのを感じる。今日は曇天で、空には分厚い雲の層が張りめぐらされているが、それでも、ときには雲の切れ目から、あまり強くない日ざしがふりそそぐこともある。

ランチ・タイムのさい、東京とナホトカの時差が一時間だとのアナウンスがあつて、時計の針を一時間すすませる（東京とナホトカは同じ経帯時にはいっているが、ソ連では一九三〇年にモスクワ法定時が採用されて全国的に時計が一時間すすめられた）。時差といえは、この船には時差時計または時差地図ともいふべき珍らしいものがある。それは、縦三

メートル、横五メートルほどもあるソ連全土の地図の要所所——オホーツク、ハバロフスク、イルクーツク、タシケント、モスクワほか数カ所——に、現地時間を示す時計をはめこんだものである。これを見て私は、同じソ連という國の西端と東端との時差が一時間もあることを知り、ソ連領土の広大さにいまさらのように感じ入った次第である。もちろんソ連が地球の陸地面積の六分の一という世界最大の領土を擁していることは、頭のなかでは十分解っていたが、しかし、実際に時計の針をすすませたり時差地図を眺めたりしているうちに、ソ連領土のとてつもない広大さが、まさに実感をともなうて迫ってきたわけである。

それはともかく、昼食後はスナック・バー（ここではまだ日本円が通用する）でロシア流のお茶チヤイを飲んだり、デッキで海景色をカメラにおさめたりしていたが、午後四時頃（ナホトカ時間）、はるか水平線上にソ連領沿海地方の山のつらなりが見えてきた。これがはじめて見るアジア大陸の山々であり、ソ連の山々だと、ひとしきり感慨にふけたことである。さて、こうしてバイカル号はいよいよナホトカ港に近づいてきたわけで、私は船室に帰って所持品の整理をしたり、配

布された入国手続きの書類に必要事項を書きこんだりしたが、そうこうしているうちに、六時すぎ、バイカル号は静かにナホトカ港内にはいつてゆき、やがて埠頭に横づけされた。横浜を発つたのが五日の正午、ナホトカ着が七日の午後六時一〇分（日本時間、午後五時一〇分）。つまりバイカル号は、横浜⇨ナホトカ間をほぼ予定どおり五三時間あまりで運航したわけである。

入国手続きのため船内にしばらくとどまったのち、六時四〇分、いよいよ下船。はじめて踏むソヴェトの土！ 私は胸の高なりをおさえることができなかった。

波止場ではソ連の港湾労働者たちが忙しそうに立ち働いている。埠頭には純白のバイカル号が横づけになっていて、その船首に朱色で **BAIKAL** と書かれているのが、ひどく印象的であった。

私は、通関手続きのため、埠頭から少し離れたところにある税関事務所へ向った。そこには、すでに大勢の下船客がつかけていて、バイカル号から自分の荷物——これは各自の船室まえの廊下に置いて下船することになっていた——がトラックで運ばれてくるのを待っていた。トラックは約一〇分

おきにやってきて、五〇人分ほどの荷物をおろしてはまた埠頭の方へひきかえしてゆく。私はトラックがくるたびに、おろされた荷物のなかから自分のものを見つけようとするのだが、三台目のにも四台目のにも私の荷物らしいものは見あたらない。どうしたことかと、私はだんだん心配になってきた。そのとき私は、これはもしかして、私のトラックが社会党の使節団一行の荷物のなかへまぎれこんだためではないかと考えはじめた。というのは、前記のとおり私は一行の事務局長である沖崎氏と同じ船室にいたが、氏の話では、使節団の場合にはソ連側の招待だからその荷物は税関を通さず無条件にパスさせることだったからである。もっとも、そうしたミスはおこりえないとも思われた。というのは、下船直前にインツォーリストの係員が使節団一行の荷物をチェックしていたとき、私は一行のメンバーでないことをその係員に念をおしておいたからである。

しかし、とにかく私の荷物はいくら待ってもやってこない。荷物がこないと通関手続きがとれない。とうとうしびれを切らして、私はインツォーリストの係員を見つけだし、君は私の荷物を使節団一行の荷物のなかへ入れたのではないかと問い

ただした。すると彼もハッと気がついたらしく、しばらく幹部のものと相談したうえ、私にむかって、あなたの荷物はすでにハバロフスクゆき列車に運びこまれていると思われる、そこで特別にバスを仕立てるから駅まで行って自分の荷物をとりもどしてきてくれないかという（ナホトカでは棧橋と駅がかなり離れている）。仕方がないから、私はそれではそうしようといって、大型バス（私専用の！）で駅へ行き、貨車のなかへ私自身ははいりこんで、うず高く積みあげられた荷物の山から自分のトランクをやつとのことで見つけたわけである。それからバスでもう一度棧橋の税関事務所へひきかえしたのだが、入国早々にこんな手ちがいがあって、まったく閉口した。

バスが税関事務所に着いたのは八時半すぎで、もうそのころには下船客のほとんどが通関手続きを終えていた。私の場合、税関検査は、ソ連側にミスがあったせいもあってか、ごく簡単に終わった。そのあと、通貨の両替その他の手続きをして、こんどは他の乗客と一緒にバスに乗って駅に向い、ハバロフスクゆき列車の車中の人となったわけである。このときはすでに午後九時二〇分で、一〇分後の九時半にはわれわれ

の列車はハバロフスクにむかって出発した。インツーリストの係員に問いたたすのがもうすこしおそかったら、あるいは列車に乗りおくれたのではないかと思われる。実際、あぶないところであった。

ところで、この列車は普通座席車と寝台車にわかれていて、寝台車のばあい、進行方向の右側が通路、左側がコンパートメントになっている。そしてコンパートメントは軟席（一等）が二名定員、硬席（二等）が四名定員である。私の車室は硬席であったが、たまたま他の乗客が一人もいなくて私ひとりである。

この列車はハバロフスクどまりのローカル急行で、日本ではいえは、さしずめ東北線の急行列車に当るものと思われる。それにしても、この列車の車室はなかなか立派で、各ベッドには小さいながらも机とスタンドがそなえつけてある。だから定員四名のこの車室を私ひとりで占領すると、なんだかひどくゆったりした気分になって快適であった。

さて、列車がナホトカを発って間もなく、私はようやく空腹を感じて食堂車へ行ったが、そこではソ連人、ドイツ人、フランス人、イギリス人、日本人らが入り乱れて食事をとっ

ていて、文字どおりインタナショナルな眺めであった。私が空席を見つけて腰をおろしたとき、どこからともなく「カチューシャ！」という叫び声（これがまたロシア人の口から発音されると大へん魅力的なひびきをもつ）が飛んできたりした。これはすぐ、だれかがウエイトレスの名前を呼んだのだと解ったが、それはともかく、こうして私は、このガヤガヤとロシア語、英語、ドイツ語などのミックスされた雰囲気の中で、自分は外国にきた、しかもソ連にやってきたのだという実感にひとしきりひたつたのであった。まったくすばらしい「国際列車」のひとつときであった。

一〇月八日（金）

朝七時、列車の軽いひびきで目をさます。車窓のカーテンをひらくと、きれいに耕されたコルホーズ農地がはてしなく続いている。そのなかに、ところどころコルホーズ農家の集落が点在している。ここかしこに白樺の林があって、朝霧が美しく立ちこめている。まだ雪が降った形跡はなく、またところ、いかにものどかな農村風景である。列車は中ソ国境ぞいにハバロフスク目ざして北上している。

朝食後、自室付近の通路に立つて窓外の景色を眺めている

と、インツォリスト案内係りのアシスタントだというソ連女性か、なにか不自由を感じるようなことはないか、と英語で話しかけてきた。私は、べつにそういうことはないかと答えたが、彼女はその後いろいろな質問してくる。問われるままに、自分はこれからモスクワとブラーグを経由してロンドンへ行き、そこで約一〇カ月間滞在する予定であること、自分の専攻分野はマルクス経済学であることなどを告げたが、彼女には、私がマルクス経済学を研究しているのが気に入ったらしく、だんだん話はずんできた。彼女はウラジヴォストックの大学で比較言語学を勉強しているとのこと、かたわら英会話の練習のために、一種のアルバイトとしてインツォリストの仕事を手伝っている由であった。私はソ連学生のアルバイトということに興味を感じて——ソ連では授業料はもちろん無料、奨学金も親がよほどの高給とりでないかぎり全学生に支給されるはずだから——、そのことについてたずねてみたが、彼女の話では、奨学金だけでは生活がいくらか窮屈であり、他方、学生の知識や技術を生かしたアルバイト、たとえば理工系学生の工場実習とか、外国文献の翻訳、また彼女の場合のような通訳などは、教育的見地から大学当局によ

って奨励されているということであった。

この女子学生は、どちらかといえば西欧的なムードをただよませた女性で、比較言語学をやっている彼女としては当然のことながら、私がイギリスへ留学すると知って、しきりにうらやましがっていた。もっとも、彼女の愛好する文字者はトルストイだということであったが……。

こうして私は、列車の廊下にたたずんだまま、この女子学生とすつかり長話をしてしまった。こんなに長話をしていると彼女の仕事にさしつかえるのではないかと、私はいささか気になったが、アシスタントの気楽さがあるのか、彼女のほうは平気なもので、なおもモスクワやレニングラードのすばらしさを力説したり、窓外の景色をあれこれ説明してくれた。が、列車がビキンという駅に停車したとき、彼女は私に別れを告げて立ち去っていった。

この列車は、あと二時間ほどでハバロフスクに到着するはずなので、私は車室へ帰って荷物の整理にとりかかった。ただし荷物といっても、大型トランクのほうはナホトカの税関事務所までモスクワまでの別送手続きをとっておいたから、エア・バッグ一つという身軽さである。

正午すぎ、われわれの列車は終着駅ハバロフスクに到着した。ホームへ降りると空はどんより曇っていて肌寒い。なんとはなしに、シベリアの風土といったものを感ずる。

ホームに降りた人々は、ほとんどみんなバイカル号の下船客のようで、これらの人々は、ここで、飛行機でモスクワに向うもの、シベリア鉄道を利用するもの、というふうに分れるわけであるが、それはともかく、一〇〇名前後もいる日本人はここではないわば一大勢力をなしている、まるで日本人のグループ旅行といった観を呈していた。

私は午後四時三〇分発の飛行機でモスクワに向うことになっていたので、駅前の広場へ出て、そこに待っていた空港ゆきバスのほうへ歩いていったが、途中、社会党の使節団一行の人々とふたたび出会った。これから一行は農村視察をかねてシベリア鉄道でイルクーツクへ行き、そのあと飛行機でモスクワを訪れるということであった。そこで私は、一行の人々と別れのあいさつをかわして空港ゆきバスへと急いだ。

バスが空港に着いたのは午後一時頃。空港に着いて驚いたのは、この事務員の仕事ぶりがおそろしくのんびりしていることであった。インツォーリストの係員二名がモスクワゆき

飛行機の搭乗手続きをするわけだが、ここでは外人（つまり非ソ連人）の乗客が多いのだから、とうぜん、英語を話すスタッフを配置すべきだと思われるのに、ここの係員は二名のうち一名はロシア語一辺倒である。だから乗客一五〇人ほどをさばくのには三時間近くもかかったのではないかと思う。日本人乗客のなかには、待ちくたびれて不平をならすものがあった。

私の搭乗手続きは列についてから約二時間後に終わった。その間に私は空腹を感じて待合室の売店でパンとジュースを買ったが、このときはじめて私はソ連の通貨を実際に使用した。というのはソヴェト旅行のばあいには、船内の食事はもちろんのこと、列車内の食事とその代金は運賃などとともに、日本を発つまえにあらかじめ日本交通公社等をつうじてインツールリストに払いこむ建前になっていて、それまではまったく現金の使用を必要としなかったからである。ちなみにソ連のコインは大国に似ず概して小型で、ことに一カペイクと二カペイクの銅貨は極端に小さいが、ただ、どのコインにも例の「種と鎌」の国章と СССР（ソヴェト社会主義共和国連邦の略）の国名が刻印されているのがソヴェト貨幣らしさを感じ

させる。

それはともかく、午後四時、空港事務所のアナウンスがあらって、私たちは、トロツコを数台連ねたような乗りものでモスクワゆき旅客機に向う。飛行場には大小さまざまな飛行機が散在している。私たちの飛行機は、ソ連のアエロフロート（АЭРОФЛОТ、民間旅客航空会社）が誇る大型旅客機 TU—一四型（四発ターボプロップ機、一七〇人乗り）である。

そばで見ると尾翼でさえも、首が痛くなるほど上の方を見あげなくてはならない。

午後四時三〇分、私たちの機がエンジンのうなりをたてはじめた。この巨大な怪物が、メイン滑走路まではゆるゆると右へ行ったり左へ行ったりしながら、まるで自動車のように器用に動くのには、すっかり感心した。さてメイン滑走路にたどりつくと、機は緊縮一番、ものすごいなりをたてて滑走しはじめた。と思うと、もう離陸してぐんぐん高度をあげてゆく。三〇分後には、すでに高度八〇〇〇メートル近くになっていたと思う。

機内の窓から見る景色はまったく異様で、私ははじめて入道雲の正体を見た。ふつうの雲はいわば偏平で、窓から見下

すと文字どおり雲海といった感じであるが、入道雲はこの雲海のうえにそびえたつ五重、六重の塔といった感じである。

そして雲海——これ自身はるか下方に望まれるのだが——のすきまから、そのはるか下方に、シベリアの山々や平原が見えるわけで、非常に見事ではあるが、なんだか目まいのしような光景でもあった。

ところで、ハバロフスクとモスクワの時差は七時間。こんどは時計の針を七時間おくらせるのだが、このあたりから時間の觀念がいささか混乱してくる。ハバロフスクを発つたのが午後四時半だから間もなく日が暮れるはずであるが、西へ西へと飛行機が飛んでゆくから、いくらたっても日が暮れない。まったく変なもので、実際には九時半あまり機内に入ったのだが、私たちがモスクワに着いたのはまだ夕方の七時頃であった。

途中、とくに印象に残ったのは、機内のアナウンスで窓外を見下すと、はるか眼下にエニセイ河がくつきりと銀色に輝いていたこと。それから、機内の食事がひどくまずかったこと。毎回同じようなのが——お茶おチャの時間をふくめて——三回も出てきて、私は早くもロシア料理に食傷しはじめた。しか

も、機内で出される水は妙な味のするミネラル・ウォーターで、これにはほとほと閉口した。

さて午後七時一〇分、私たちのマンモス旅客機はモスクワ空港に着陸した。もう日の暮れた空港には事務所付近に赤い大きなネオンで MOCKBA とあつて、それがひととき新鮮やかであった。ソ連の首都モスクワ！ いま私はそのモスクワの一角にたたずんでいる。私はしばし感慨にふけるのを禁じえなかつた。

空港からシティ・センターまではかなりの距離があつて、バスで四〇分くらいかかったように思う。私に割当てられたウクライナ・ホテルは三〇数階建ての高層建築で、室数九〇〇あまり、収容人員一五〇〇人以上という大ホテルである。

しかもフロントの係員の話では私の部屋は二七階だということであった。むろんエレヴェーターはついているが、二七階ともなるとエレヴェーターもなかなか乗り甲斐がある。

私の部屋はバス、トイレつきはかなり広い部屋で、調度品（ベッド、机、ラジオ、電話、テーブル・セット、洋服ダンスなど）も大へん立派である。私は旅装をとり、ほっと一息ついた。時計を見ると、もう九時を回っている。私はさす

がに旅の疲れを感じたので、しばらくぶりに入浴して——考
えてみると、これが日本出発後はじめての入浴であった——、
一〇時すこしまえに就床。

二 モスクワでの数日間

一〇月九日（土）

午前八時起床。

窓のカーテンを開くとモスクワの朝景色が眼を射た。なに
ぶん私の部屋は二七階にあるので窓外の展望はまったくすば
らしい。昨夜は気がつかなかったが、このホテルはモスクワ
川のほとりに位置していて、眼下にモスクワ川とその周辺の
景色が美しく望まれる。

洗面後、私はホテル一階のレストランで朝食をとるためエ
レヴェーターに乗ったが、私が乗るとエレヴェーター係りの
ソ連婦人が、日本語で「イッカイデスネ」といったのには驚
いた。このウクライナ・ホテルには日本人旅行者がよく泊る
と聞いていたが、彼女はそうした日本人から片言の日本語を
覚えこんだものようである。

ホテル一階のロビー周辺には、レストランのほかにインツ

ーリスト事務所、売店、スナック・バー、みやげもの売場な
どがあつて、もうたくさんの方が忙しそうに行きかっている。
私は、昨夜インツーリストの係員から手渡されたクーポニー
——ここでも食事代はこれまでと同様、現金ではなくクーポ
ンで支払うことになっている——をもつてレストランへ入った。
席につくと、すぐボーイがやってきて英語で注文をとる。私
は卓上のメニューを見てハム・エッグとミルクを頼んだ。パ
ンは、黒パンのほか各種の欧風のパンが竹製の籠に盛られて
テーブルごとにそなえつけられている。このウクライナ・ホ
テルにはヨーロッパからの旅行者が多いためか、ここではロ
シア的というよりもヨーロッパ的な雰囲気がよく感じられ
る。メニューもロシア語のほかに英語、フランス語、ドイツ
語で示されているし、料理の献立にも多分に欧風のものがと
り入れられている。

朝食をすませた私は自室へ帰って、中日新聞のモスクワ特
派員である古木氏のところへ電話をかけたが、氏の住いはウ
クライナ・ホテルのすぐ近くにある由で、「これからホテル
の玄関まで迎えに行きましょう」ということなので、私は氏
のお宅を訪れることにした。古木氏は私の同僚・辻和夫助教

授（本学経営学部）の義兄にあたる方で、同時に私の中学時代の先輩にもあたる。すでに三年目の特派員生活なので、氏はモスクワには非常に詳しい。私は氏のアパートにお邪魔して、さいきんのモスクワソ連事情についていろいろと興味深い話をうかがった。氏の奥さんも大へん親切な方で、私の来訪を予期して準備しておいてくれたらしい。日本料理の屋敷に、私は舌つづみをうった。早くもロシア料理に食傷していた私であるが、このときばかりは大いに食慾を感じたことである。

ところで、古本氏の話では、今日は氏自身は仕事の都合で案内できないが、ガリーヤさんという氏の秘書が私をクレムリンとその周辺へ案内してくれる手筈になっているとのことである。そのガリーヤさんは午後一時すぎにやってきた。そこで私は、彼女とともにタクシーでクレムリンへ向った。

ガリーヤさんはモスクワ大学日本語科の出身で、日本にも二回通訳として訪れたことがある由であった。といっても、彼女の日本語はテナワワがしっかりしていないので、意味をつかむのにささか骨が折れる。しかし、彼女はソ連（とくに革命前のロシア）の歴史に大へん詳しくて、クレムリン内

の名所や名品の由緒来歴をこまごまと説明してくれて実に有難かった。

さて、クレムリンはモスクワ市のほぼ中心に位置していて、モスクワ川の岸にそった高台にある。総面積は約二六ヘクタール、周囲には石の城壁がはりめぐらされている。その城壁のところどころに合計二〇の望楼がそびえているが、これらの望楼はその昔、トーチカの役目を果たしたものだという。

一九三五年、革命一八周年にあたって、五つの望楼の頂上から従来の「荒鷲の紋章」（ロシア皇帝の紋章）がとりさられて、そのかわりにルビーの赤い星がつけられた。その五つの望楼というのは、スバスカヤ塔、ニコリスカヤ塔、トロイツカヤ塔、ポロヴィツカヤ塔、ヴォドヴズヴォドナヤ塔であるが、そのうちもつとも美しいのはスバスカヤ塔である。これはイワン三世時代の建立になるもので、高さ七四メートル、塔上には巨大な時計（文字面の直径が六メートルあまり、自重は二五トン）がついている。

クレムリンへの入口はスバスカヤ塔、トロイツカヤ塔、ポロヴィツカヤ塔の三つであるが、私たちはスバスカヤ塔の下の入口から構内へはいった。すぐ右手にクレムリン劇場があ

り、そのむこうにはソ連最高会議幹部会の建物が見える。そして前方にはウスペンスキー寺院、ブラゴヴェシチェンスキー寺院、アルハンゲリスキー寺院など、いくつもの寺院の建物がたちならび、金色のクーポル（円屋根）が群をなしてそびえている。

石畳の道をしばらく歩くと、私たちはイヴァン大帝の鐘樓へやってきた。この鐘樓のまえには、世界一の巨鐘「鐘の王様」がある。これは一七三三〜三五年にロシアの名匠イヴァン・マトーリンとミハイル・マトーリンが三年がかりで鑄造したもので、直径が六・六メートル、重さは二〇〇トン近くもあるという。ただし、この鐘は一度も鳴ったことがない。「鳴らずの鐘」だそうである。

イヴァン大帝の鐘樓の近くに、もう一つ、帝政時代のロシアのすすんだ鑄造技術を示すものがある。それは「大砲の王様」であって、一五八六年の作、重さは四〇トン。これも一度も発射されたことがない由である。

さて私はガリーヤさんの先導でアルハンゲリスキー寺院のなかへ入っていった。この寺院は一五〇五年から一五〇九年にかけて建立されたもので、ここには歴代のツァーや貴族の

遺体が安置されている。周囲の壁は、ロシアの画家たちが一六五二〜六六年にロシア民族の独立闘争を主題として描いたといわれる壁画でおおわれている。なお、ここで私は、はじめてロシア語の古語を見て、それが現在のロシア語と大きく違っていることを知ったが、同行のガリーヤさんはモスクワ大学の出身だけあって、古語にも十分精通しているふうであった。

アルハンゲリスキー寺院を出た私たちは、しばらくクレムリン構内を散歩することにした。今日は土曜日のせいもあってか、ソ連の各地からモスクワへやってきたらしいお上りさんふうのソ連人の姿が多く見うけられる。私たちはウスペンスキー寺院、ブラゴヴェシチェンスキー寺院、大クレムリン宮殿、クレムリン大会宮殿、武器殿などの美しい建物を見物しているうちに、ふたたびスバスカヤ塔へやってきた。そこで私たちはこの塔の門をくぐって「赤の広場」へ出た。

「赤の広場」は、私が想像していたよりもいくらか狭い感じであったが、しかし広場全体の情掃がゆきとどいていて、じつに美しい。広場に一歩足をふみ入れてまず目につくのは中央正面のレーニン廟である。周知のように、この廟の内部

にはレーニンの遺体をおさめた石棺が安置されており、入口には赤軍の衛兵が二人、銃をもって直立不動の姿勢で立っている。彼らは一時間ごとに交代するのだそうだが、それにしても、この姿勢での一時間は大へんな重労働にちがいないと思われたことである。

私はレーニン廟のまえにたたずんで、しばし往時のレーニンのことなどを偲んでいたが、やがてガリーヤさんに促されて廟のうしろ側へまわってみた。そこには、十月革命でたおれた労働者や兵士の墓があり、またその付近のクレムリンの壁は小さく仕切られて、マクシム・ゴリキー、セルゲイ・キーロフら共産党の指導者たち——日本人・片山潜もふくめて——の骨壺がおさめられていた。

「赤の広場」の東、クレムリンの向い側にグム (ГУМ 国営百貨店) がある。これは一四〇の部門をもつソ連最大のデパートで、ここには毎日平均二〇数万人の客が訪れるという。私はガリーヤさんと一緒に内部へ入っていったが、週末のせいもあってか非常に繁忙ぶりである。とくにアイスクリーム・コーナに人気があるらしく、そこにはたくさんさんの若い男女が列をなしていた。商品の種類も量もなかなか豊富で、みた

ところ日本のデパートの風景と大差はない。値段書きを見た感じでは、やはり食料品や衣類などといった必需品は安く、カメラ、テレビ、時計、トランジスタ・ラジオなどはかなり高いようである。そして一般に商品の質やデザインの点では、まだいくらか見劣りがするように思われた。

私がグム内部の観察に大きな関心を示したのを見てとって、ガリーヤさんがもう一つのデパート「子供の世界」へ案内しようという。私は即座に同意した。

「子供の世界」はすぐ近くにあった。これは子供用品専門の大きな国営デパートで、子供を大切にするソ連の国策のあらわれといえよう (モスクワには子供劇場やピオネール宮殿もある)。ここは入口も内部も人の波であふれるばかり、グム以上の混雑ぶりである。やはり子供連れの客が圧倒的に多い。一階売場の中央に大きな木馬が飾りつけられてあって、その周辺に、子供の喜びそうなオモチャや教材やお菓子などが豊富に陳列してある。ここでもアイスクリーム・コーナに人気が集っていて、子供たちはソフト・クリーム片手に熱心にオモチャに見入っている。なかには、父親に肩車してもらって飴をしゃぶっている子供もいる。まったく、ここは子供

の天国であり「子供の世界」である。

さて、私たちがこのデパートを出たときはもう五時すぎで、暮れやすいモスクワの街はすでに薄暗くなっていた。私は、ガリーヤさんに厚く礼を述べて、バスでウクライナ・ホテルへ帰った。

一〇月一〇日（日）

朝食後、自室でモスクワ市街地図を眺めていると、一〇時頃、古本氏がやってくる。今日は日曜日なのでモスクワの南部地方を車で案内しようという申し出である。私は早速、外出の用意をして氏の車に乗りこんだ。

最初に訪れたのはノヴォデーヴィチー寺院。ここは現在は尼寺になっているが、もともとはクレムリンの山城として一六二四年に建立されたものである。クレムリンの寺院と同様、いくつもの金色のクーボルがそびえていて、折からの陽に輝いて目もさめるばかりに美しい。なかでもスモレンスキー寺院のクーボルがひとときわ高くそびえている。この寺院は一六五二年に建てられたもので、内部には一七世紀後半のイコン（聖像）が飾られている。

ノヴォデーヴィチー寺院には付属墓地があり、そこにはゴ

ーゴリ、マヤコフスキー、プロコフィエフらの墓がある。またスターリンの二度目の妻アイルエーヴァの墓もある。私は古本氏に案内されてチェーホフ夫妻の墓のまえにたたずんだが、そこには日本の訪ソ新劇団一行が植えたという桜の木が深い緑をたたえていた。この墓地には、そのほか有名無名のソ連市民の墓がたくさん並んでいたが、それらの墓はそれだけにデザインをこらした特色あるものであった。ただ、ほとんど例外なく、墓石のまえに死者の写真が飾ってあるのは、われわれ日本人にはあまりにも生々しい感じで、いささか無気味であった。これはやはり生活習慣のちがいによるものであろうか。

ノヴォデーヴィチー寺院を出た私たちは、こんどは、モスクワ全市を展望できるレーニン丘で車をとめた。この丘はもと「雀ガ丘」といい、一八一二年にナポレオンがここまでやってきて、ロシア軍の降伏使節の到来を待ったそうだが、そのとき市内各所にあがった火の手は三日三晩にわたってモスクワ全市を焼き払い、ためにナポレオンは厳寒に遠征の兵士たちを暖める宿舎もなく、悲劇的な退却を余儀なくされたという歴史の地である。この丘にたたずむと、満々と水をたた

えたモスクワ川が眼下に流れ、すぐ対岸には、収容人員一〇万人という巨大なレーニン・スタジアムが見える。さらに、そのむこうにはクレムリンの城壁や寺院などが望まれる。とにかく、ここはすばらしい眺望の高台である。

このレーニン丘の背後に、芝生をしきつめた美しい公園をへだててモスクワ大学の新学舎がある。この学舎の建設は一九四九年に着工され、四年後の五三年に完成をみたという。

学舎の中央部には三三階建ての建物がそびえたち、その両側にそれぞれ一七階の建物が配されている。頂上までの高さは二四〇メートルにおよび、正面の長さは四五〇メートル。

まさに高層マンモス・ビルである。ここに理科系の六学部（物理、化学、地理、力学Ⅱ数学、地質、土壌生物学）がはいっており、他の文科系の八学部（経済、文学、新聞、法学、歴史、哲学、東洋語学、それに外国人留学生のための予備学部）はクレムリン近くにある旧学舎を使っているとのことである。

私はモスクワ大学留学中の小檜山という人の案内で明日あらためてモスクワ大学を訪れる予定になっていたので、今日は大学構内へは入らず、レーニン丘からの偉容を望むだけ

にとどめておいた。

さて私たちは、レーニン丘からの見事な展望を堪能したのち、モスクワの環状道路をドライブすることにした。モスクワ市の道路は、都心の広場から放射線状に出てゆく道路と、それを円形または半円形で切る環状道路とを幹線として組み立てられている。そして環状道路は、一番まんなかにブリヴァール環状道路、その外側にサドーヴォエ環状道路、さらにその外側に自動車高速道路という具合に通じている。私たちはサドーヴォエ環状道路をドライブしたのだが、この道路は立派に舗装されていて、道幅も非常に広い。ただ古本氏の話では、歩行者にも運転者にも案外交通規則を守らないものがあるとのことであった。それはともかく、私は、車窓を過ぎゆく街の景色について古本氏からいろいろと説明を聞きながら、一時間近くモスクワ市内のドライブを楽しむことができた。

古本氏と別れて、ひとまずホテルに帰ったのが午後二時すぎ。ホテルのレストランで昼食をとってから、私は自室へひきかえしたが、その途中、私は中年の外人紳士に呼びとめられた。彼はいきなり私に握手を求めて、英語で「あなたはスウェーデンにどのくらい滞在しましたか」とたずねる。私は

なんのことかと、しばらくあつけにとられていたが、これは、私が肩にかけていたエア・バッグのせいだと解った。つまり、この紳士は、私のエア・バッグにスカンジナヴィア航空のマークがついているのを見て、私がスウェーデンを訪れたものと速断したわけである。実際には、このエア・バッグはたまたま日本交通公社の人がサーヴィスにと進呈してくれたので携行したまでのものだったので、私はどう答えたものかと返事に窮したが、彼は「とにかくスウェーデンを訪ねて下さってありがとうございます」といって立ち去っていった。自国を訪れた（と彼の考えた）日本人をモスクワに見かけてひどく気をよくしたらしい彼に、私はなんだが申しわけないような気がしたことである。

そのあと私は自室へ帰って、しばらく手紙書きなどしていたが、夕食までにはまだかなり時間があるので、もう一度、こんどはひとりでクレムリン周辺を散歩しようと思いたち、四時頃、市街地図を片手に徒歩で出かけた。ウクライナ・ホテルからクレムリンまでは、かなりの道のりがあったが、もともと散歩のつもりだから苦にはならない。ゲルツェン通りを三〇分ほど歩くとマルクス大通りに出た。クレムリンを見

ると、城壁に空高くそびえるいくつもの望楼、燦然と輝く金色のクーポル、近代的で斬新なスタイルのクレムリン大会宮殿——これらのものが渾然一体となって、美しい調和をかもしだしている。私は、しばらくこの絶景に見とれていたが、やがてマルクス大通りを北にすすんでポリシヨイ劇場、マルクス記念像、エンゲルス記念碑などをゆっくりと見物した。

こうして私は、たそがれどきのモスクワの街を気の向くままに散策していたわけであるが、このとき一人のソ連人が私のところへやってきて、英語で「一緒にお茶でも飲みませんか」という。私はソ連の市民と直接話し合うのも悪くないと考え、さそわれるままに、とある喫茶店へはいっていった。しばらくは雑談をして、なんとということもなかったのだが、そのあとがいけなかった。彼はいわゆるドル買いだったのである。むろん私はドルなどもっていないとはっきり断ったけれども、彼のほうは、ドルとルーブルの換算率を示したりして実に執拗である。さいきんソ連では、外貨（とくにドル）獲得のために外貨専用の店——いわゆるドル・ショップ——があちこちできて、そこでは、市販されていない外国製の靴、カメラ、服、時計、テーフ・レコーダーなどが買えるし、

またソ連製品も三〇四割安く入手できるので、ドルを欲しが
るソ連人が出てきたようである。とにかく、このとき私は、
革命後五〇年近くも経ったソ連にもこういう人物がいるのか
と慨嘆せざるをえなかった。そして、つきまとうそのソ連人
から逃れて無事ホテルへ帰ったときには、実際、ほっとした
ことである。

一〇月一日(月)

朝十時すぎ、前記の小檜山氏の来訪をうける。氏の話では、
今日の午後三時からモスクワ大学経済学部のアゴロフ教授
と対談できるよう手筈をととのえてくれた由である。

小檜山氏は、モスクワ大学に留学してすでに数年になり、げ
んざいは同大学の大学院に在籍しておられるということであ
る(なお私を氏に紹介して下さったのは本学経済学部の小野
一郎氏である)。私は、ツァゴロフ教授に会うまえにモスク
ワ大学の新学舎を案内しようという小檜山氏の提案にしたが
って、氏とともにタクシーでレーニン丘に向った。

タクシーをレーニン丘で止めて、私たちはモスクワ大学の
構内へはいった。中庭にモスクワ大学の創立者ロモノソフの
像が立っている。エム・ロモノソフはロシアの優れた学者で、

一七五五年にモスクワ高等学校を創立したが、それが現在の
モスクワ大学の前身である。だからモスクワ大学の正式の名
は「ロモノソフ記念国立モスクワ大学」という。

ところで、モスクワ大学には前述のように理科系の六学部
と文科系の八学部とがあり、学生数は三万人以上、教職員は
約三〇〇〇人。むろんソ連最大の大学である。それにしても、
中央の建物が三二階建て、両翼の建物が一七階建てというこ
の壮大な新学舎は、われわれ日本人から見ると、いかにも
ぜいたくに思われるが、小檜山氏によると、建物のスペース
の大半は学生の寄宿舎に当てられているそうである。ここで
はモスクワ市内の居住者を除き全寮制がしかれていて、それ
ぞれの学生に七畳程度の居室があてがわれているということ
である。そして寄宿舎には食堂、売店、郵便局、病院、プー
ル、体育館など、学生生活に必要なものがほとんどぜんぶ揃
っており、学生たちは一步も外へ出ないでも生活ができるほ
どだという。

さて私たちは、正面入口近くのエレヴェーターを利用して
教室、講堂、図書館、博物館などをつぎつぎと見学したが、
そのいずれもなかなか大したものである。たとえば、図書館

の蔵書数は二四〇万冊におよぶということであり、また大講堂の收容能力は一五〇〇人、このほかに一九の中小講堂がある由である。とにかく、この新学舎は「科学の殿堂」といわれるに足る立派な設備内容をもっていると見うけられた。

学生食堂で軽い昼食をとったのち、私たちはバスでマルクス大通りのモスクワ大学旧学舎へ赴いた。この旧学舎のほうは五、六階建ての古風な建物である。ここにもロモノソフの記念像がある。私たちはしばらく構内を散歩してから、三時かつきりに経済学部の研究室にツァゴロフ教授を訪ねた。

ツァゴロフ教授はモスクワ大学経済学部の政治経済学講座の主任教授であるが、一九六一年、『コムニスト』誌上に「政治経済学の科学的教程作成の諸問題」という論文を発表し、そのなかで、社会主義経済学の体系化にさいしての『資本論』の方法（上向法）の有効性をよく主張した人である。そして教授は、この見地から一九六三年に『政治経済学教程』全二巻を編集・公刊し、社会主義経済学の体系化の問題をめぐるソ連学界の広汎な論争に直接のきっかけをあたえたのであった。

ところで、ツァゴロフ教授は私たちの来訪を待っておられ

たらし、私たちは、受付で来意を告げるとすぐ教授の研究室へ通された。私は、長身で恰幅のよい教授と初対面のあいさつをかわしたのち、小檜山氏の通訳で約一時間半にわたって教授と対談したのだが、そのさいの中心的な話題は、社会主義のもとの商品生産と価値法則の問題であった。この問題をめぐって私は教授に、いくつかの質問——社会主義のもとでの商品生産の存在理由を教授はどのように考えておられるか、教授は社会主義社会における価値法則の利用の問題をどのように解されているか、など——を発したわけであるが、そうした質問をつうじて明らかとなった教授の見解はおよそつぎのようなものであった。

(一) 社会主義のもとでの商品生産——教授自身の言葉でいえば「商品貨幣関係」——の存在の根拠は、たんに協同組合的・ホルホーズ的所有の存在に求められるべきではなく、同時に全人民的的所有そのものの未成熟に、すなわち労働の直接的・社会的な性格の未成熟のなかに求められねばならない。

(二) 社会主義のもとでの「商品貨幣関係」は旧社会からの「母班」にすぎないのであって、社会主義に内在的・本来的なものとは解すべきではない。(三) 社会主義から共産主義へ

の移行のためには「商品貨幣関係」と価値法則が全面的に利用されねばならないが、しかしそのばあい、社会主義的生産のもっとも普通の運動形態である「計画性」に、どこまでも優先的な地位があたえられるべきである。(四) 共産主義社会では「商品貨幣関係」も価値法則も止揚されるが、そのためには、たんに国民経済における全人民的所有の専一的支配だけでなく、労働の性格における根本的な変化が、すなわち労働の社会経済的不平等の克服が不可欠の前提となる。

なお私は、教授編集の『政治経済学教程、第二卷、社会主義』では、まず第一部で過渡期経済論がとりあつかわれ、つぎに第二部で社会主義経済論が展開されている点を問題にして、こうした歴史的な仕方での篇別構成は社会主義経済学の体系化にさいしてのマルクスの論理的方法の適用を力説される教授の方法論的立場そのものに抵触するのではないかと質問したが、この点については残念ながら、教授から明快な回答を得ることができなかった。

それはともかく、ツァゴロフ教授は私の発したいくつかの質問に答えて、およそ前記のような見解を述べられたのであって、そのさいの教授の話しぶりは実に懇切をきわめたもの

であった。私は、教授がその多忙な時間を私との対談のために割いて下さったことに深い謝意を表して、四時半頃、小楡山氏とともに教授の研究室を辞した。

そのあと私は小楡山氏の先導ではじめてモスクワの地下鉄に乗ったが、これはソ連御自慢のものだけあって、非常に立派なものであった。地下一〇〇メートルも掘っている感じが、プラットホームまでエスカレーターで降下するのだが、その傾斜がやや急で、しかも速度が速い。この速いエスカレーターで色とりどりの服装のソ連人たちが上から下へ、下から上へと連はれる光景は、私にはひどく印象的なパノラマに思えた。面白いのは、ソ連にもずいぶんせっかちな連中がいると見えて、この速いエスカレーターの上を自分でまた降りたり上ったりするものがあり、そのため、自分で歩かない人は右側に立ち、左側はせっかち組みのために空けておくことである。なお、プラットホームには大理石の彫刻やモザイクの柱など、非常に凝った装飾がほどこしてあって実にきれいである。

私はキエフスカヤ駅で小楡山氏と別れて下車し、そこから歩いてウクライナ・ホテルへ帰った。

今日は朝から雲が低くたれこめてひどく寒かったが、夕刻にはとうとう雪がちらつきはじめた。

一〇月二日（火）

朝起きて窓から外を眺めると一面雪におおわれていて、まったく見事である。少々寒くはあったが、モスクワの雪景色を見るのができたのは、かえって幸いであった。朝食時のボーイの話では、一〇月中旬にこんなに雪が積ったのはモスクワでも珍しいとのことであった。

私のインツォーリスト発行のヴァウチャーには六時間分のエクスカーション（ハイヤー、通訳つきの市内見物）のクーポンがあったので、今日はこれを利用して国民経済博覧会とレニン博物館を見学することにした。

インツォーリストの事務所で手続きをすませて、しばらく待っている、一〇時頃に通訳がやってきた。英語の通訳だろうと思っていれば、レギーナさんというモスクワ大学日本語科出身の女性である。このレギーナさんは、どことなく東洋的な感じをただよわせた小柄な女性で、日本語もなかなか達者である。

私たちは、インツォーリストのハイヤーでまず国民経済博覧

会へ行った。この博覧会の会場はモスクワ市の西北部にあつて、都心からは相当はなれている。車で三〇分ほどかかったが、正門近くになると、宇宙飛行の成功を記念するオペリスクが空高くそびえたっている。ここで車をとめて、私たちは正門から会場へはいった。

レギーナさんによると、この博覧会はソ連が科学技術や産業（とくに農業と工業）の分野で達成した最近の成果を展示する常設の一大展示場で、その前身は一九三九年に開設された全ソ農業博覧会だということである。これに工業博覧会がくわわり、一九五九年、両者をもとに現在の国民経済博覧会がつくられたわけである。この博覧会の敷地は約二平方キロ、会場内には七八のバヴィリオン（陳列館）と、ほかに約三〇〇の建物があるという。そして場内には花園あり、散歩道あり、噴水あり、彫像ありで、会場全体が一大公園の観を呈している。

かぎられた時間内にこの広大な会場をぜんぶ見てまわることはとても不可能なので、私は小型の無軌道電車で場内を一周したうえ、いくつかの主要なバヴィリオン——原子力館、機械製作館、宇宙館、電化館、農業館——を見学するにとど

めたが、この間、レギーナさんが私のためにゆきとどいた説明をしてくれて有難かった。これらの各パヴィリオンでは革命後のソ連の技術的・産業的發展の経過と現状、その最新の成果などがグラフィックや製品や機械の展示をつうじて手際よく示されていた。また各パヴィリオンは建物自身、それぞれ独自の民族建築の様式をあらわして美しかったが、これは以前、ここにはソ連の一五の共和国についてそれぞれ民族的特色をこらした共和国別パヴィリオンが設置されていたためだということであった。

会場内にはあちこちに食堂がある。私たちはその一つに入つて昼食をとつたが、そこはホテルのレストランとはちがつて非常に庶民的な雰囲気であった。ちょうどランチ・タイムだったせいもあって、たくさんのお客がたてこんでおり、食事をしていられるもの、お茶を飲んでいるもの、おしゃべりしているもの、とにかく大へんな活気である。私はソ連市民の日常生活の一端にふれた思いがして楽しかった。

昼食後、私たちは見事な噴水「諸民族の友好」のある広場を通つて、正門前へひきかえした。時計はすでに一時を指している。急いだ積りであったが、博覧会の見学にたっぷり二

時間半かかったわけである。私たちは、待たせてあったハイヤーで、こんどはレーニン博物館へ赴いた。

この博物館は「赤の広場」近くの都心にあつて、一九三六年五月一五日に開設されて以来、年々二〇〇万人にのぼる參觀者があるという。今日も館内は熱心な參觀者たち——そのなかには、かわいい小学生の一行や制服姿の赤軍兵士のグループも見られた——であふれるばかりであった。

館内二〇の展示室には、レーニンの生涯と事業を示すあらゆる資料——手紙、写真、手稿、著書、論文、遺品等々——が年代順に陳列されている。それらのものの一つ一つに、私はつきない興味をおぼえたが、なかでも、レーニンが一九一八年に暗殺されかけたときの衣服は、貫通した銃弾の跡を示して生々しかった。なお、ここでもレギーナさんが最初のうちはいろいろと説明してくれていたが、しかし彼女は学生時代からもっぱら文学を愛好してきたというので、やがてここでは私のほうが彼女をガイドする羽目になつてしまつた。彼女に聞かれるままに、私はレーニンの著書や論文の標題が日本ではどのように訳されているかを知らせたりなどしたわけであるが、彼女はその都度、しきりにメモをとつて

いた。これを見て私は、彼女の仕事熱心なのにすっかり感心した。

展示室を一通り見学したのち、私はレギーナさんのすすめに応じて、館内映写室で一〇月革命の記録映画を見た。これは三〇分程度の短編ものであったが、ありし日のレーニンの声と姿に接することができて有益であった。

ところで、いったいにホテルなどでは資本主義諸国からの旅行者が多いので、ソ連にいるという感じがとかく稀薄になりがちであるが、このレーニン博物館にはやはり革命的な雰囲気が充満していて、私は、いかにもソ連らしい空気を満喫することができた。

さて、レギーナさんは四時半までにインツーストの本部事務所へ帰えらなければならないということなので、私は博物館前で彼女と別れてハイヤーでウクライナ・ホテルへ帰った。

明日はいよいよモスクワともお別れである。そこで夕食後、この数日間大へん世話になった古木氏宅へお礼とお別れのあいさつにゆく。九時頃ホテルへ帰えり、荷物の整理などとしてから入浴し、一〇時に就床。

一〇月三日（水）

午前七時起床。

朝食をすませて、八時すぎ、前日手配しておいたタクシードモスクワ郊外のシェレメティエヴォ空港へ急ぐ。途中、大へんな吹雪である。空港周辺がとくにひどかった。

ところが、空港で出国手続きや搭乗手続きをしているうちに空は嘘のように晴れあがっていた。プラーグゆき飛行機（TU—一四型機）は予定どおり出発するという。こうして私は九時五〇分、プラーグ経由でロンドンに向うべく、白雪におおわれたモスクワの街をあとしたのであった。